

美術館からのメッセージ

No.2

～画家として、 一人の人間としての 香月泰男とは～

のことを香月家よりお話しして、
お願いをしたところ、ファン
のひとりとして快く書いて下
さったものです。

ここで緒形拳さんの手紙を
紹介しますと、(一部省略)
「香月先生は、私のいちばん
すきな作家です。」
執着します。

将来ヨコハマの高台に小さ
なカズキ館をたてたいと、ひ
そかに思っておりませう。自分
の目でしっかりとカズキ作品
を凝視したく思います。

いよいよ完成間近になった
美術館の玄間に、『三隅町立
香月美術館』と館名が黒御影
石に刻まれました。
この銘文は、香月芸術にぞつ
こんの俳優緒形拳さん直筆の
もので、この度、美術館建設

は作画の呼吸の深奥を極めて
いるものといつも思っている。
実際はさほどでもなかったか
も知れぬが。彼ら二人のそ
の折の年齢は、今の私よりずつ
と若い。常時死生の間を彷徨
して人間はあんなにもなれ
るものかと、今の我が身を恥
じるばかりである。

今日描いている仕事が絶筆
と言つものになるかも知れぬ、
なるであろうと念じおれば我
とてあの心境になれるのでは
ないかと思ひます。

私は、決闘に勝った武蔵の
行動に移るまでの心の準備の
あり様が好きだ。一瞬に一生
を圧縮した行動、一生を一瞬
と見極めた心。何も決闘だけ
に必要な心境ではあるまい。

人間誰しも追詰められれば否
応なしに覚悟しなくてはなら
ぬことと思う。
私は勝敗が決つたその場か
らの武蔵の引揚げ方に、何と
も言えぬ美しさ、呼吸を感ず
る(多分に脚色されてはいる
が、それでも)。絵の仕事も
ああでなくてはならぬと思つ
つ。

ここで、画家のことばに「一瞬
一生」とありますが、まさに
その気迫、キャンバスに描き
現わす心が芸術を通じて見る
者側に感動を与えるのではな
いかと思ひます。だから多く
の方々のファンが生まれてく
るのではないでしょうか。

「一瞬一生」とは

「著者画家のことばより」
武蔵、巖流の舟島での決闘

この呼吸は、私の師の藤島、
梅原両先生の作画態度にもう
かがわれるようだ。だから、
学生のころの藤島(武二)先
生は石舟斎のようにこわかっ
たし、外の梅原先生もト伝の

ようにおそろしい。

昭和四十七年一月

香月泰男

文中「常時死生の間を彷徨
している人間はあんなにもな
れるのか」……とありますが、
画家自身にあつても戦争、そ
してシベリア抑留という酷寒
の中で重労働、飢の体験は
形こそ違つても生死の心境は
同じの様に思えます。

そして画家自身がキャンバ
スに向うたび、その心を忘れ
ることなく作品を完成させた
ことで、画家香月泰男にしか
ない作画があるのではと考
えます。

☆香月美術館開館日 が決定!!

◎平成5年10月25日(月)開館
◎一般公開は翌日26日より～

短歌

三隅短歌会

(順不同)

濃き色に咲きし菖蒲を詠まん
とてそのいる深きにひかれて
たてり 河野真理子
新緑のトンネルぬけて突然に
視界は開け里の声する 堀 光太郎

休日が多きにつれて釣竿も所
せましと増えて行くなり 上田 愛子

新学期黄色い傘の連らなりて
リーダーの子の眼は輝けり 松野美津子

入院は与えられたる休養とマ
ッサージしつつ甥を励ます 山中 敬子

陽に向きて物干す母の白髪が
風に吹かれて光る寂しさ 平川 育子

星かげの見えざる空をひたす
らにとぶジェット機の赤き点
滅 立間 雅子

渚辺に燃ゆるつゝ、じのあか
くと吾も一輪となりて佇む 伊藤 一郎

